

第十二章 警備……………一〇〇

警察——消防施設

第十三章 神社及名勝古蹟……………一〇一

津守神社——佛閣——名勝舊蹟

第十四章 民情風俗……………一〇五

第十五章 編入の顛末及村の解散……………一〇八

目次 (終)

津守村誌

第一章 總論

津守村は大阪府西成郡に屬し、大阪市の南方に連なる同郡南部四ヶ町村の一に數へらる。而して村はもも木津川河口の寄洲の上に開拓せられたる新田にして津守新田と稱し、又其の位置は木津川の西に連なれるを以て一に木津島とも謂へり。然るに明治三十年四月大阪市の第一次接近町村編入の後獨立して一村となり、以て現今の稱を用ふるに至り。村は其の位置大阪市の南方に連なり、木津川下流の東岸に位し、廣袤東西僅かに五六町に過ぎざれども、南北里餘に亘り、其の面積零・一六五方里餘を有し、形狀あたかも帶狀をなす。

本村は極めて新興の土地にして其の始めて開拓せられたるは、徳川時代の中葉元祿時代の事にして、今を去る僅々二百二三十年前の事に過ぎず。されば本村の歴史は極めて短少なりとなすべく、其の以前の歴史は全たく之を有せざるなり。即ち遠き古代にありては本村の地は素より、東方の木津、難波、今宮、勝間、粉濱等の諸村の地も悉く住吉浦、或ひは津守浦と稱する海面にして、渺茫たる大阪灣の一部に屬したりしもの、如く、こは古き記録、古圖、其の

他幾多の遺蹟等に徴するも略想像し得らるゝ所なり。然るに時代の推移と共に海底漸次露出して陸地化し、之等の土地には平安朝の末期より室町時代にかけて多数の村落の發達を見るに至れるものなるが、獨り本村の地は尙ほ後世に至るまで、永く海底に屬したれば其の開發は最も遅れたり。即ち本村は始め住吉浦の一部なりしが、後世地形の變遷と共に木津川の河口となり、更に徳川時代に入りて益々土砂の堆積するもの多く、遂に一面の葭洲を變りしを元祿年間に至りて、人工を以て其の周圍に堤防を築き、河水或ひは海水の浸入を防ぎ、漸次埋立てて之を耕地となせるものなり。従つて本村の歴史は僅かに二百二三十年間に過ぎず、之を東方なる天王寺、住吉、黒江等の諸村が遠く神代の昔より既に國史上重要な地点を占め、其の名の古くより知られたるに比すれば素より、隣村たる今宮、玉出、粉溜等の諸村が六七百年以上の歴史を有せるに比せんか、其の歴史は年代に於て著しき相違ありきなきざるべからず。而のみならず本村は其の位置木津川尻にあり、紀州街道より十數町を隔てたるが上に土地極めて低濕なれば、木津川の舟運の便ありき雖も、産業上に於ても農業以外に全然顧みらるゝものなく、従つて國史上何等重要事項の起れるものなし。されば村内には何等特筆すべき事蹟なく、名勝、舊蹟の存するものなし。故に本村の歴史的價値は殆んき見るべきものなしきならずも敢て過言にあらざるなり。

斯の如く本村は國史上、全く其の名の現はれざりしは素より、一般世人には其の存在をすら認められざりし程なりき。されば今や村が大阪市に編入せられんきするに當りても、他の附近の町村が何れも住宅地或ひは工場地として殆んき純然たる市街地を形成せるに反し、獨り本村のみは今尙ほ發展の度著しく遅れ、村内の大半は農村の域を脱するに至らざるものある又故なきにあらざるなり。勿論本村が其の發展の度の他に比して著しく遅れたる原因に就ては他に幾多の理由なきにあらざるも、そは後に記す機會あれば此には之を略す。

然れども尙ほ村内の状況を詳細に觀察せんか、近年大阪市の戸口は著しき増殖を見、商工業日に盛なるに及び、漸次工場地域を郊外に求めざるべからざるの狀態となり、明治四十二年には大日本紡績株式會社津守工場の村内に設けられしを始めとして、大正二年には木津川セメント株式會社の設けらるゝあり、更に歐洲大戰の餘波は我國經濟界に異常なる好況時代を現出し、殊に本邦商工業の中心地たる大阪の工業界は目覺しき活況を呈するや、木津川の水運の便を有する本村は、工業地として頗る有利なる地位を占め、ために大小の工場簇出し、加ふるに木津川土地運河株式會社は巨額の資本を投じて、此の地の開發を企畫する等、茲に村は工場地として一大發展を見るの機會に遭遇せり。尙ほ是より先、明治三十三年には高野鐵道の汐見橋より村の北部を経て南方住吉、堺、河内等を過ぎ橋本に通ずるもの敷設せられ、而かも村の北部には木津川驛の貨物停車場を設け、同線の貨物運輸上に資する所ありしかば、村内の陸上交通運輸の便また著しく開け、今又新に難波菅原より本村を南北に縦貫して南方なる堺に通ずる阪堺電鐵の敷設せられんきするものあれば、之が開通の曉には從來の面目を一新し、更に一大工場地と化する蓋し遠きにあらざるべし。即ち是れに依つて見んか、本村の地は是れを一言にして謂へば、過去の地に非ずしてむしろ將來の地なりと稱す

るを得べし。而して今や村の前途は大いに囑望せられんじつゝあるの秋に際し、大阪市に編入せられ更に其の將來は大大阪の一部となり其の發展や益々期待せられんじつ。されば今次の市部編入たるや、木村にしては最も意義深きものなりとなさざるべからず。

更に翻つて村内の状態を見るに、古き徳川時代の事は暫らく之を措き、明治維新後の村内の状況に就いて記さんに明治二十二年町村制實施以前にありては、戸數並に人口も極めて少なく、到底獨立の戸長を置く能はざりしかば、隣村勝間村と同一戸長役場管理區域内に屬せしめられし程なり。更に町村制の實施せらるゝに際しても、到底獨立の一村を形成する事能はず、ために木津川西岸の各新田と共に川南村の一部となり、其の一大字として依然津守新田の稱を用ひたり。然るに明治三十年四月大阪市の第一次接近町村編入の事起るや、川南村の木津川以西の地は悉く大阪府に編入せられしかば、茲に餘儀なく従來の津守新田のみを以て一村となし、獨立して津守村となすに至れり。然れども尙ほ當時にありては人口僅かに八九百餘に過ぎず、到底獨立して村政を運用する能はざるの貧村なりしかば、隣村今宮村と組合を組織し、組合村役場を置きて漸やく村政の運用を維持したりしなり。斯くて其の後人口漸やく増加するに及び、同三十六年四月今宮村との組合を解散して、茲に始めて純然たる獨立の一村となれり。是れ實に今より僅かに二十二年前の事に過ぎず、以て本村が過去に於て如何に寒村なりしかを察知し得らるべきなり。

次に本村の財政状態を見るに、津守新田が始めて一村として津守村の稱を用ひたりし頃は素より、今宮との組合村を解散せし當時に於ける本村の財政状態は、極めて貧弱なるものにして村財政の前途は頗ぶる危惧の念を以て見られ、果して圓滿なる村政の運用を維持し得るや否やをすら危ぶまれたる程なるは、今尙ほ當村の村政に參與せし人々の記憶に新たなる所なり。然るに明治四十二年の頃より、村内に前述の如き大工場の設けらるゝものあり、ために爾來村費の大半は之等の工場の負擔する所となり、茲に村は全たく財政状態を一變し、一躍郡内多數の富裕村となるに至れり。斯くて今や一ヶ年の歲計豫算の如きも二十萬圓の多きに達し、而かも尙ほ村民の負擔は極めて軽く、他の附近の諸町村が年々村内の施設に追はれて、町村費は益々膨脹し財源の之に伴はざるがために財政難に陥り、或は村民に過重なる負擔を課し、或ひは多額の町村債を起して、漸やく之が困難を免れつゝあるに反し、獨り本村は村民の負擔極めて輕微なるが上に些の村債をも有せず、而かも村内の施設は常に他に比して一步を先んずるの状態にあり、即ち上水道施設の如きも大正三年に之が完成を告げ、全國町村中に於て最も先鞭をなせるが如き、又村内は人口の如きも今尙ほ七千七百餘に過ぎざれども、地域南北に長く、ために村内唯一個の小學校を以てしては兒童の通學に不便なる所より、村内には第一、第二、第三、の三校を設けて兒童就學の便に備ふるが如き、他の町村が兒童の通學の便、不便を顧みるの餘裕なきのみならず、ひたすら必要に迫られながら財政難のために、充分なる施設をなす能はずして多大なる不自由を凌がざるべからざるに比せんか、全たく雲泥の相違なりとなさざるべからず、斯くの如きは實に本村が其の財政の如何に餘裕あるかを示せるものなりとすべし。

最後に村内の産業状態其の他に就いて之を見るに、村の中央部以北並に西部の木津川沿岸の地は、陸には高野線の電車の便あり、西には木津川の水運の便あり、従つて各種の工業盛に起り、人口の如きも稍稠密なり。雖も、中央部以南の地は今尙ほ耕地の面積廣く、而かも耕地は概ね低濕にして水田多く、部落は東部十三間川の堤防に沿ふて幾分散在するに過ぎず。従つて村内の大半は今尙ほ農村の面影を存し、人口の密度の如きも隣村今宮、玉出、粉溜等に比すれば著しく粗なり。みなさざるべからず。然れども今や將に阪堺電鐵は村の中央を南北に従貫して敷設せられん。すされば之が完成の曉には更に工場地として著しき進展を見、一大工場地と化するは左程遠きにあらざるべし。唯本村が土地極めて低濕なれば、將來工業地として大なる發展を見るに當り、工場並に住宅を建設するに頗ぶる不便なるものあり、従つて多大なる支障を免かれざるは、本村として最も遺憾なる点なり。みなさざるべからず。

第二章 地理

位置及疆域

本村は大阪市の南方に連なり、西成郡南部四ヶ町村中其の西端に位し、木津川尻の東岸に沿へる村にして、廣袤東西

僅かに六七町に過ぎず、南北一里八町餘にして其の形宛然も带状をなせり。面積五十萬五千四百坪、即ち零・一六五方里餘にして、西成郡南部四ヶ町村中今宮町に亞ぎ、粉溜村に比すれば約二倍に相當せり。而して東部は十三間川の細流を以て今宮、玉出、粉溜の三ヶ町村に境し、北は七瀬川を隔て、大阪市の一部に連なる。西は木津川を隔て、同じく大阪西區に對し、南は堤防並に小溝を以て東成郡敷津村に連なる。

地勢

本村は既に總論に於て述べたるが如く、大古は勿論極めて近世に至るまで海底に屬し、後漸やく木津川尻の寄洲に化せしを周圍に堤防を築き、以て海水又は河水の浸入を防ぎ、次第に埋立て、耕地をなせる土地なれば、土地極めて平坦にして、且つ低濕なるを免かれず。而して河川は東部粉溜、玉出、今宮との境界線に十三間川の北流するものあり、村の北端宇上島に於て鮎川の下流なる七瀬川に合し、西流して木津川に注げり。西部には府下有數の大川木津川の南流するものあり、一部は分れて運河に依つて大阪築港に連れども、本流は堤外に沿ひ南流して大阪灣に注ぐ。木津川は水量多く、ために水深く且つ川幅廣ければ船舶の出入極めて頻繁なり。故に本村は直ちに海洋に面せざれども水運の便頗ぶる良好なり。みなすを得べく、更に東部の十三間川は幅員僅かに五六間に過ぎざる小流なれども、輕舸の

運漕に便にして、且つ村内耕地の灌漑に頗ぶる便利なれば、村内の耕地はために大部分水田にして米の收穫多し。

木津川

木津川は淀川の流末に於ける一支流にして、川幅廣く水深ければ、昔時より安治川と共に大阪に於ける船舶出入の要津をなせしものにして、川は中の島の西なる土佐堀五丁目より分岐して南方千本松堤に至りて海に注ぐ。其の長さ凡そ七十丁餘を有し、東岸に木津村ありし故を以て木津川の名起れり。而して川は天正の頃織田信長の石山本願寺を攻めし當時に於ける古戰場にして、其の名世に聞いたり、されば左に信長記より摘録せんに

七月十五日の事候(天正十四年)中國安藝の内能島、來島七八百艘大船を催し、大阪表海上乗出し兵糧可入行候打向人數まなべ、沼野、宮崎、尼崎、小畑、花くま、野の口是等も三百餘艘乗出し、木津川口を相防候、御敵者大船八百艘計也、乘懸相戰候、陸者大阪ろうの岸、木津、ゑつ田が城より一揆共、競出住吉後手之城へ足輕を懸天王寺より佐久間右衛門人數を出し、横手に懸合推しつ推される數刻の戰也、箇様候處、海上にほうろく火矢なご、云物をこしらへ御身方の舟を取籠投入々々焼崩、西國船は勝利を得大阪へ兵糧入。云々
ごあり又亦安西軍記には

天正三年石山の本願寺信長卿に攻めらる、顯如上への加勢にして毛利家より兵糧船六百餘艘警護船三百餘艘巖して差上らる、晝夜急ゆる程に七月上旬に播州室の津着岸す。信長卿よりも大船三百艘木津川口に横たへ、其外兵船三百餘艘相隨つて通路を差塞、中々大阪へ可入様ぞなかりけり。中國の船には野島も村上も船軍は代々其妙を得て次第々々にせり込、敵船に乗移切迫ける程に、あだけ二艘乗取けり、其外截取小舟は數知らず。

ごあり、何れも當時の戰況を記せるものなり。然れども茲に留意すべきは、當時の地形は現今と著しき相違ありし事なりごなす。即ち當時本村の地は尙ほ其の大部分は海底或ひは木津川の河底にして、今の今宮町宇出城が木津岩を設けし址なりご云へば、恐らく其の附近が木津川の河口に相當せしものご想像し得らるべし。

十三間川

十三間川は東成郡敷津村の東南端大和川堤、宇三關の水門より同川の水を引き黒江、敷津兩村の境界を過ぎ、更に北流して本村に、粉濱、玉出、今宮及び大阪市南區西落町との境界を経て、村の北端に於て脚川の下流七瀬川と合し、更に西方木津川に注ぐ。今は幅員僅かに三間乃至五六間に過ぎず、水深も浅く而かも流水は湍激して、一見下水溝の如き状態をなし、加ふるに夏季は概ね涸渴して、春秋冬の三季のみ漸やく輕刺の運漕を見るのみなりご雖も

もミ名を新堀又は内川ニ稱し、元祿十一年（津守新田が始めて開發に着手せられし年）に開鑿せられしものにして一説には彼の有名なる治水家河村瑞軒の設計に成れる運河なりニ傳ふ。然れどもこは恐らく津守新田の開拓のために掘鑿せられたるものゝ如し。而して其の延長四十四町幅員十三間を有せしかば、俗に之を十三間川ニ呼ぶに至りしニ云ふ。又攝津誌に依れば「木津川の西に起り、木津川の水を引き、堺の北に於て海に注がしむ」とあり、明かに本川が木津川の水を引きて南流せしものなる事を記せり。されば現時ミは全く正反對に流れたるものにして、こは一見奇異の感なき能はず、現今の地勢より推察するミきは、攝津誌の記するところは到底今人の首肯し能はざる所なるべし。然れども仔細に考究せんか、攝津誌の示す所全く事實にして、即ち十三間川の開鑿せられたる當時は、未だ大和川は現今の如く西に轉鑿せられず、北流して淀川に注ぐる時代なれば、大和川の水を引く事能はざりしは素より、今日の十三間川の上流たる敷津村の附近は全く海濱の葭洲にして極めて低濕なりしかば、到底此の附近の水を引きて北流せしむる事能はざりしや必せり。故に木津川の水を引きて南流せしめしたりしは當然の事なりミなきざるべからず。然るに其の後間もなく寶永元年には新大和川の掘鑿成り、茲に始めて大和川の西流を見る事ミなり、斯くて年々大和川より流出する土砂のために其の河口附近は急激の度を以て埋没せられ、土地漸次高まるに及び、遂に十三間川の水も南流する事能はざるに至り、遂には反つて大和川の水を引きて木津川に注がしむる事ミはなりぬ。而して其の何時の頃より大和川の水を引きて北流せしむるに至りしかは詳かならざれども、攝津誌

に記す所より推察せんか、享保の頃までは南流せしものなるべし。尙ほ古老の言に依れば十三間川の水も昔時は頗ぶる清澄にして、沿道の住民は其の水を飲用に供したる程なり、且つ村内宇東島なる白山氏舊邸の庭には十三間川の水を引きたる泉水あり、而かも其の水の清きを以て誇りミせりミ謂へば、以て昔時同川の水が如何に清冽なりしかを知らるべし。更に昔時は兩岸の堤防には松の並木あり、其の間には楊柳の茂れるありて頗ぶる風情に富み、明治初年の頃までは毎年陰曆二月の頃には、大阪より遊客の盛に此の川に樓船を浮べて住吉密の汐千狩を催せしミ云ふ。然るに今は全たく昔日の面影を没し並木の松は根跡をだに留めず、川は埋れて漸次其の幅員を失ひ、流水は年々に涸濁の度を増し、今は纔かに輕舸の運漕及び附近耕地の灌漑川に供せらるゝのみミなり、漸やく運河の根跡を留むるに過ぎず。されば現時の十三間川の様を見ては、何人か其の變遷の甚だしきに一驚せざるものあらんや。

氣候 風土

本村は氣候概ね温順適和にして、四時の氣温は略大阪の市内ミ相似たるものありミなすべく、殊に海岸に近きたため四時氣温の調節を受けて頗ぶる生活に便利なり。風は冬季に於て西北又は北東の風多く、夏季は西南の和風多し。然れども夏季は夜間往々にして風死することありて蒸熱に苦しむことありミ雖も、こはひりり本村のみの現象にあらず

大阪灣は素より廣く瀬戸内海に面する沿岸各地の通有性にして、むしろ本村の如きは大阪市内の如く戸口稠密ならざれば、著しく凌ぎよしみなざるべからず。次に雨量は之亦精密なる調査をなすべき適當なる設備なければ、確實なる數字を以て表はすこと能はざれども、略大阪市内と同様なりと見るを得べく、一ヶ年の平均雨量は千三百耗前後なりと見れば差支へなかるべく、されば耕作物には極めて適度なりとみなすべし。斯の如く村内は氣候極めて温順適和なるが上に、雨量又適度にして且つ地味沃饒なれば耕作に適せるは勿論なり。然れども土地概ね低濕にして濕氣多く夫がために耕地の大部分は水田にして米の産出稍多しと雖も、豊穰なりとみなすを得ず、更に其の他の農産物も亦比較的少なし。

區劃

本村は元來津守新田と稱し、明治二十二年町村制の實施せらるゝに當りても、川南村の一大字として依然津守新田の稱を用ひたる所なれば、同三十年四月津守村として一村獨立したる後に於ても、村内には大字名なく僅かに番地を以て區別するのみ。然れども昔時より村内には左の如き字地名あり。

上島、沖の側、北島、堀の側、東島、西島、南島、崎島、小雛畑、

第三章 戸數及人口

本村は既に述べたるが如く、其の始めて開發せられてより僅々二百一三十年を経たるに過ぎず、而かも木津川十三間川等の水運の便ありと雖も、土地概ね低濕にして域内は殆んゞ水田を以て満たされ、住宅又は工場地として適せざるが上に、且つ陸上交通の便を缺けるがために産業も農業以外に全たく見るべきものなく、而かも其の産額亦土地の面積に比し豊饒ならざりしかば、従つて人口の如きも極めて僅少に過ぎざりしなり。されば明治三十年始めて村が獨立の一村となりし當時にありては、人口僅かに八九百に過ぎざりき。然るに同三十三年には高野鐵道の汐見橋より本村の北半を過ぎて南方河内に通ずるもの敷設せられしかば、茲に漸やく陸上交通の便を増すことゝはなれり。然れども當時は尙ほ村内の土地は舉げて白山氏個人の所有に屬し、住民は悉く小作農に従事するものゝみなりしかば、他の地方より移住するものにては全然なく、従つて人口の増殖を見る事なかりき。されば明治三十六年今宮との組合村を解散せし當時に於ても、尙ほ人口千百餘、戸數僅かに三百餘に過ぎざりしなり。

斯くて同四十年の頃より村内に漸次各種の工場の設けらるゝものあり、殊に同四十二年大日本紡績津守工場の設けらるゝに及び、人口著しく増加するに至れり。更に歐洲大戰勃發後、經濟界未曾有の好況時に遭遇するや、木津川の

水運の便を受けたる村の西部は、たちまち工場地帯として著しき發展を見る事となり、茲に戸口益々増加し、遂に近時は人口七千七百餘、戸數千七百を數ふるの大村落となるに至れり。然れども之を他の隣接町村たる今宮、玉出、粉濱等の諸町村に比せんか、尙ほ其の増加率は著しき遜色あるを免れざるべし。而してこは全たく本村の地理的關係に依るは勿論なり。雖も、又一面村内の土地が一個人の占有に屬し、而かも其の上には永小作權の設定せらるゝものありしかば、自由に之が賣買移轉をなし能はざりしによる事も、亦見逃がすべからざる所なり。信ず。左に人口増加の趨勢を示さん。

年 度	戸 數	戸數比較増減	人 口	人口比較増減
明治三十三年末	一七八	—	一、〇四八	—
同 三十六年末	三三二	一四三	一、一一一	六三
同 四十年末	四六五	一四四	一、八八一	七七〇
同 四十三年末	六〇三	一三八	三、〇〇二	一、一二一
大正二年末	八六四	二六一	三、九一六	九一四
同 四年末	一、〇三一	一六七	四、六七四	六五八
同 五年末	一、〇四〇	九	五、一二八	四五四
同 六年末	一、〇八七	四七	五、四七〇	三四二

同 七年末	一、二五〇	一六三	六、三五一	八八二
同 八年末	一、三一五	六五	六、八四〇	四八八
同 九年末	一、三七二	五七	七、〇八一	二四一
同 十年末	一、三九〇	一八	六、八六七	二二四
同 十一年末	一、四四一	五一	七、〇五一	一八四
同 十二年末	一、七三八	二九七	七、七八九	七三八
同 十三年末	一、六九八	△ 四〇	七、七〇四	△ 八五

第四章 沿革

津 守

本村が始めて開拓せられて津守新田の稱を用ひたるは、既に述べたるが如く元祿時代なれば僅々二百二三十年前の事に過ぎず、其の以前にありては殆んご顧みらるゝ所なき木津川尻の密洲にして、全然不毛の地なりしなり。更に其